

幼児の向社会性と親の援助規範意識について

Relationship between Sociality in Preschool Children and Parents' Normative attitude toward helping

稲垣実果 田中真紀 石川隆行※
INAGAKI, Mika TANAKA, Maki ISHIKAWA, Takayuki

I. 問題と目的

1. 幼児の向社会性について

現代の子どもの社会性に関する親の意識調査（調査対象者2000人）として株式会社バンダイ（今福、山崎、2004）が行ったものによると、幼児期と児童期前半、児童期後半の親が述べる子どもたちの長所は「優しく、思いやりがある」ところが第一位となっている。思いやり行動には、人間関係の結びつきをより積極的につくり、他者との交流を円滑に方向付ける役割がある。しかし、石川（2003）も述べるように、近年、社会性の欠如により、「キレる」という言葉に代表される出来事が、幼い子どもの間でも頻繁に起こっている。たとえば、幼児が突然暴力を振るうことや、児童が粗暴ないじめを行うことなどである。このような子どもの行動を抑制させ、豊かな心を育むためにも、社会性の形成は大きな役割を果たす。

思いやりに関する心理学的用語として、向社会的行動と愛他的行動がある。向社会的行動の代表的な研究者である Eisenberg と Mussen（1989）は、「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為のこと」を向社会的行動と定義する。一方、愛他的行動は、「他者への同情とか内面化された道徳的原則に従おうとする願望によって動機づけられた行為」である。愛他的行動は向社会的行動の一種であるので、「他人のためになることをしようとする自発的な行為」という点で同じであるが、報酬を期待したり、社会的承認を得たいというような自分の利益を優先するのではなく、相手のことを思い、相手の利益や幸福を優先して行う活動であるとされる。

小島（2007）は、仲間関係の成立や維持には、相手と「うまくやっていく」能力をその子どもがどの程度有しているかが関係していると述べている。相手の意図や主張、感情を文脈にそって理解する力や、多少反発的な気持ちが生じて、適切にその情動を制御し、相手と交渉していく力、あるいは向社会的行動などが、仲間関係の成立や維持に重要な役割を果たす。こうした力を十分に備えた子どもは、初対面の相手とも難なく打ち解けることができる。一方、こうした社会的スキルに未熟さの残る子どもや、相手の気持ちを正確に認知する能力が不十分な子どもは、仲間から拒否されることが多く、その経験がますます他者認知の能力や情動制御の能力を伸ばす場を逸することにつながる。以上のように、向社会的行動に関連するものとして、自己制御機能が挙げられる。自己制御機能は、「自己の要求や意思に基づいて自発的に行動を調整する能力」（新名、1991）と定義されている。これには「自己の意志や欲求を明確にもち、これを他人や集団の前で表現し主張する」自己主張的側面と、「集団場面で自分の意志

※宇都宮大学

や欲求を抑制・制止しなければならない時、これを抑制する」自己抑制的側面の二つの側面が含まれている。自己主張には、「いやなことや他と違う意見をはっきり言える」「やりたい遊びに他の子を誘って遊べる」などが挙げられ、自己抑制では、「ほしいものを待てる、人に譲れる」「きまり・ルールを守る」「くやしいことや悲しいことに感情を爆発させない」などである（柏木，1988）。

2. 親の援助規範意識について

幼児の向社会的行動には、保護者の考え方や行動が影響を与える可能性がある。子どもは、まわりにいる人びとの言動や態度を観察しながら、行動の仕方やものの考え方を学習していくことが多く、これはモデリングと呼ばれ、社会的行動の学習や発達に大きな影響を与えている（Bandura，1986）。

援助規範意識は、援助行動を引き起こさせる個人内的要因、すなわち自発的行動を引き起こすものとして位置づけられる（薛，2010）。また、箱井・高木（1987）は、援助行動に関する文献や松井・堀（1978）の規範項目などを参考にして作成した援助規範意識尺度の分析から「返済規範意識」「自己犠牲規範意識」「交換規範意識」「弱者救済規範意識」と命名された4因子を抽出した。具体的には、他者の援助や行為に対して報いるべきであるといった互惠的な規範意識や迷惑をかけた時には償うべきであるといった補償的な規範意識を「返済規範意識」、自分のことは後回しにしても他者を援助しようという極端な自己犠牲的意識から自分が不利になるのなら他者を助ける必要はないといった極端な利己的意識までが含まれている「自己犠牲規範意識」、援助に見返りを期待し、自分が有利になるような援助なら行うべきであるといった「交換規範意識」、自分よりも弱い立場の人が困っているなら助けるべきであるといった「弱者救済規範意識」である。ただし、箱井・高木（1987）では、「交換規範意識」と他の因子との間に負の相関関係が認められている。このことから本研究では、「交換規範意識」を“援助に見返りを期待せず、また自分が有利になるかどうかに関わらず援助を行うべきであるという意識”とする。

3. 本研究の目的

以上により本研究では、第一に幼児の愛他性と社会性のひとつである自己制御機能との関連を検討する。さらに第二に、親のどのような援助規範意識が幼児の愛他的行動に影響を与えているのかについて検討するため、親の援助規範意識と幼児の愛他的行動との関連について調査する。

II. 方法

幼児の愛他性と自己制御機能および親の援助規範意識との関連性を調査するために、京都市内のE幼稚園、F幼稚園、T幼稚園に協力を依頼し、アンケート調査を実施した。

1. 調査対象者

幼稚園年長児61名（男児24名，女児37名）とその保護者61名が調査に参加した。幼稚園年長児の平均年齢は5.66歳であった。また、その親の年齢は20歳代から50歳代であった。調査時期は2011年11月～2012年2月であった。

2. 愛他性の測定

長山・千羽・平井（1991）と帆足・平井・千羽（1991）の児童用愛他性尺度を参考に、幼児の日常生

活・友人関係をテーマに物語を作成した。そして、紙芝居形式で物語を読み、物語の最後に「もしあなたが主人公ならどうしますか」と質問する。質問項目によっては、その理由も尋ね、回答を調査時に記録した。そして、後にそれらの回答を得点化（1～3点）した。使用した物語のテーマは以下の通りである。

（1）【友達を援助しようとする表出】

〇〇は、折り紙をして遊んでいます。その近くで友達も同じように折り紙で遊んでいました。しばらくして、〇〇は最後まで折ることができたので、今からそれで遊ぼうと思います。でも、近くで折っていた友達は途中で折り方が分からなくなって困っていました。もし〇〇なら、この友達に何かしてあげますか。

【回答の分類】

段階Ⅰ（1点）：相手の思いや立場より、自分の思いや立場を優先する。

段階Ⅱ（2点）：相手を助ける気持ちはあるが、相手の立場を考えたものではない一方的な援助を行う。

段階Ⅲ（3点）：相手の立場を理解、共感した上で相手の状況に寄り添った具体的な援助を行う。

（2）【相手の気持ちを汲もうとする表出】

△△幼稚園に初めて遊びに来た友達がいました。〇〇と皆が遊んでいるところを見て一緒に遊びたいようです。もし〇〇なら、この友達に何かしてあげますか。

【回答の分類】

段階Ⅰ（1点）：相手の気持ちや欲求を汲み取ろうとしない。

段階Ⅱ（2点）：相手の気持ちに気付いているが、自分から働きかけることはない。

段階Ⅲ（3点）：相手の気持ちに気づき、自分から積極的に働きかける。

（3）【年下の子どもを援助しようとする表出】

小さい組の友達が服のボタンを留めようと頑張っていて、〇〇はそれを見えています。あともう少しで出来そうだったのにその友達は「やっぱり出来ない」と途中で諦めて泣き出しそうになっています。もし〇〇なら、この友達に何かしてあげますか。

【回答の分類】

段階Ⅰ（1点）：相手の思いや立場より、自分の思いや立場を優先する。

段階Ⅱ（2点）：相手を助ける気持ちはあるが、相手の立場を考えたものではない一方的な援助を行う。

段階Ⅲ（3点）：相手の立場を理解、共感した上で相手の状況に寄り添った具体的な援助を行う。

（4）【相手の心情に同情、共感して相手をかばう表出】

この女の子（オレンジの服：Aちゃん）は、友達がお絵かきしていた絵にふざけて黒いクレヨンでぐちゃぐちゃに落書きしてしまいました。その友達は自分の描いていた絵にAちゃんが落書きしたので泣いてしまいました。先生はそれを見てAちゃんをとてども叱りました。Aちゃんは悪いことをしてしまったと反省して「落書きしてしまってごめんね。」と友達に謝りました。その日の帰り、〇〇はAちゃん

とAちゃんのお母さんに会いました。Aちゃんのお母さんは「Aは家でよくふざけたりしているけど、幼稚園でもふざけたりして先生に叱られたりしていない？」と〇〇に聞いてきました。もし、〇〇なら、今日Aちゃんが幼稚園でしたことをお母さんに話しますか。それはなぜですか。

【回答の分類】

段階Ⅰ（１点）：相手の気持ちを理解することが難しく、同情することも困難である。

段階Ⅱ（２点）：状況や相手の気持ちよりも、善悪の判断を優先する。

段階Ⅲ（３点）：相手の気持ちに同情、共感をして相手をかばう。一般的な善悪の基準よりも状況や相手の気持ちを優先する。

３．自己主張・自己抑制（自己制御機能）の測定

幼児の自己制御機能を測定するために、首藤（1995）の自己主張－自己抑制に関する質問20項目を使用し、親評定を用いた。首藤（1995）の幼児の自己主張－自己抑制に関する質問紙は「自己主張」（８項目）と「自己抑制」（12項目）の下位尺度から構成された。「ほとんどない。きわめて少ない」から「きわめて多い。非常にしばしばみられる」の５件法により測定した。

４．援助規範意識の測定

箱井・高木（1987）の援助規範意識尺度29項目を使用した。箱井・高木（1987）の援助規範意識は「返済規範意識」（９項目）、「自己犠牲規範意識」（８項目）、「交換規範意識」（６項目）、「弱者救済規範意識」（６項目）の下位尺度から構成された。「非常に反対する」から「非常に賛成する」の５件法により測定した。

Ⅲ．結果

１．愛他性、自己主張・自己抑制、援助規範意識について

まず、愛他性得点と「自己主張」、「自己抑制」および「援助規範意識」に関する各得点の平均値と標準偏差（SD）を算出した。その結果、愛他性得点における全体平均値は10.02（SD：1.22）であった。また、自己主張得点における全体平均値は26.84（SD：4.70）、自己抑制における全体平均値は40.57（SD：6.50）であった。さらに、援助規範意識に関する全体平均値は、「返済規範意識」31.09（SD：3.12）、「自己犠牲規範意識」27.33（SD：3.07）、「交換規範意識」20.51（SD：2.53）、「弱者救済規範意識」20.49（SD：2.04）であった。

２．愛他性と「自己主張」「自己抑制」との関連性

愛他性と「自己主張」「自己抑制」との関連を明らかにするため、愛他性尺度と「自己主張」「自己抑制」尺度との相関係数を検討した。その結果、「自己主張」が愛他性a、愛他性dおよび愛他性全体と正の相関を示したが（Table 1）、その他は無相関であった（ $r = -.170 \sim .215$ ）。

Table1 愛他性と自己主張との相関

	愛他性a	愛他性b	愛他性c	愛他性d	愛他性
自己主張	.330**	.169	.215	.309*	.402***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

さらに、「自己主張」「自己抑制」得点の高低により、4群に分類した。得点の高低については、「自己主張」「自己抑制」得点の平均値を基準にし、それより高いものを高群、低いものを低群とした。4群については、「自己主張高・自己抑制高群」(以下、高高群)「自己主張高・自己抑制低群」(以下、高低群)「自己主張低・自己抑制高群」(以下、低高群)「自己主張低・自己抑制低群」(以下、低低群)である。

以上の各群における愛他性の平均値、標準偏差および平均値の差の検定を行った。その結果示された各群における愛他性の平均値 (SD) は、Table 2 に示すとおりである。

また、「自己主張・自己抑制」得点における各群での愛他性得点の平均値の差を、一元配置分散分析によって検定したところ、低高群と高低群および、低高群と高高群との間に有意差がみられた ($F=4.50$, $df=3/57$, $p<.01$) ので、Tukey 法の多重比較を行った。その結果、愛他性得点は低高群よりも高低群のほうが高く、低高群より高高群のほうが高いことが示された。

Table2 自己主張・自己抑制得点の各群での愛他性得点の平均値 (SD) および一元配置分散分析による平均値の差の検定

	低低群	低高群	高低群	高高群	平均値の差の検定
愛他性	9.78 (1.40)	9.09 (0.94)	10.43 (0.94)	10.50 (1.04)	低高群<高低群 低高群<高高群

3. 幼児の愛他性に及ぼす親の援助規範意識の影響

愛他性に及ぼす援助規範意識の影響を検討するため、愛他性得点を低群と高群に分類した。愛他性 d については、愛他性 a ~ c よりも高度なレベルであるため、今回の分析対象から除き、愛他性合計得点 (愛他性 a + 愛他性 b + 愛他性 c) 6 点の群を低群、7 点から 9 点の群を高群とした。愛他性得点の各群における交換規範意識得点について、差の検定 (t 検定) を行った結果、愛他性 (a + b + c) 得点の高低群で有意差が認められた ($t(20)=2.27$, $p<.05$)。また、愛他性得点の各群の援助規範意識 (交換規範意識) 得点における平均値 (SD) は、Table 3 に示すとおりである。

Table3 愛他性得点の各レベルでの援助規範意識 (交換規範意識) 得点の平均値 (SD)

	援助規範意識 (交換規範意識)
愛他性 (a+b+c)	高
	SD
	低
	SD

IV. 考察

本研究では、向社会的行動傾向と自己主張傾向との間には密接な関連があると指摘した Barrett (1979) および Barrett & Yarrow (1977) の研究と一致する結果が得られ、幼児期の愛他性と自己主張とが関連していることが明らかになった。また、自己主張と自己抑制の得点での高低分類の結果、高高群と高低群が低高群よりも愛他性が高いという結果になった。さらに、子どもの愛他性に親の交換規範意識 (援助に対して見返りを期待するべきでないという意識) が影響を及ぼすことが明らかになった。

首藤 (1995) の研究によると、自己主張得点では、4 歳児よりも 5 歳児の方が高く、自己抑制得点で

は4歳児と5歳児の間に有意差は認められなかった。また、4歳児では自己主張と自己抑制の間には有意差は認められないものの、5歳児では自己主張得点の方が自己抑制得点よりも有意に高くなる傾向があることが示されている。本研究においては、愛他性と自己主張は関連を示したものの、愛他性の中でも関連があるものとそうでないものがあった。関連があったもの（愛他性a, d）は、愛他性の対象が友達であるが、関連のなかったもの（愛他性b, c）については、初対面もしくは関わりの少ない人間である。このことから、自己主張の高さは、初対面や関わりの少ない人間への愛他性ではなく、友達への愛他性に影響すると考えられる。

さらに、自己主張・自己抑制の得点の高低によって4タイプに分類したものと愛他性との関連性について検討した。愛他性が高いという結果が出たのは、自己主張と自己抑制ともに高得点の高高群、自己主張が高く自己抑制が低い高低群の2タイプであった。一方、愛他性が低い結果となったのは、自己主張が低く自己抑制が高い低高群であった。愛他的な行動を多く行う子どもは、自己主張が平均以上であることがわかる。自己抑制が自分の思いを我慢することだけではないように、自己主張も単に我を通すという意味あいではなく、周りの様子を見ながらも自分の考えを発言することができるなど、社会的に受け入れられるような主張のことであり、高度な社会的能力であるともいえる。

首藤（1995）は、幼児の母親評定による自己制御機能と、幼稚園の自由遊び場面における向社会的行動との関連を検討している。その結果、自己主張が高く、自己抑制が低い主張型の子どもは、他のタイプの子どもの比へ、自発的に仲間に対して多くの向社会的行動を行っていることを明らかにしている。それに対して、関・松永（2005）の研究では、自己主張と自己抑制ともに高いと評価された子どもは、他の子どもに比べ、他児に対して自発的な向社会的行動を多く行うことが示されている。このような結果の違いは、首藤の研究は母親による自己制御評定を用いたのに対し、関・松永の研究では担任教師による評定であったことからくるのではないかと考えられる。しかし、本調査では、高高群と高低群の方が低高群よりも愛他性が高くなったことから、首藤と関らが先行研究で述べていた両者の結果が本研究においても確認された。

また、親の交換規範意識と子どもの愛他性との関連が示されたが、この交換規範意識は、相手のことを思い、見返りを期待することなく、援助を行うべきだという意識であるという点で愛他的行動の定義と共通部分がある。このことから、親の交換規範意識が子どもの愛他性に反映されたと考えられる。

愛他的行動は、養育者が社会的行動を行うように直接示唆、しつけすることによってのみ育むことは困難である。強制的な要請と受け取られてしまい、子どもに抵抗の気持ちが生じたり、大人の賞賛を得ることのみが動機になってしまう可能性があるからである。愛他行動を実行するプロセスは複雑であり、たとえば、潜在的には相手が困っていることを理解できても、具体的に何かしてあげようという、動機付けが薄い場合があるかもしれない。また、愛他行動の判断の基準を検討すると、判断基準が内在しているのか外在しているものなのか、共感性に基づくのか価値観に基づくのかなどが含まれている。気持ちの思いやりと見た目の思いやりが一致することはもちろん最も望ましいことではあるが、特に発達途上の子どものたちにおいては、しばしばこれらの間に大きな隔たりが存在することがあるだろう。I. 問題と目的でも述べたように、モデリングは子どもの愛他性に大きな影響を与える。子どもの愛他的行動は親の行動を反映して培われていくともいえるのではないだろうか。そのため、子どもの愛他性を育てるには、周囲の大人が普段から見返りを期待することなく相手のことを思いやり、実際に行動する姿勢を心がけることが効果的であると考えられる。

引用文献

- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Prentice-Hall.
- Barrett, D.E. (1979). *Relations between aggressive and prosocial behaviors in children*. *Journal of Genetic Psychology*, 134, 317-318.
- Barrett, D.E. & Yarrow, M.R. (1977). *Prosocial behavior, social inferential ability, and assertiveness in children*. *Child Development*, 48, 475-481.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. England: Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 共訳 (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 箱井英寿・高木修 (1987). 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 *社会心理学研究*, 3, 39-47.
- 帆足暁子・平井信義・千羽喜代子 (1991). 「思いやり」の精神構造とその発達過程について (第3報) *大妻女子大学紀要, 家政系*, 27, 69-80.
- 今福・山崎 (2004). バンダイ子どもアンケートレポート Vol.103 「お子さまの長所はどんなところですか？」 http://www.bandai.co.jp/kodomo/search_2003.html
- 石川隆行 (2003). 社会性の発達 福屋武人 (編) *幼児・児童期の教育心理学* 学術図書出版社 pp117-119.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会
- 小島康夫 (2007). 乳幼児期のきょうだい関係と仲間関係 南 徹弘 (編) *発達心理学* 朝倉書店 pp168.
- 松井 豊・堀 洋道 (1978). 大学生の援助に関する規範意識の検討 (1) *日本心理学会第42回大会発表論文集*, 1298-1299.
- 長山篤子・千羽喜代子・平井信義 (1991). 幼児の思いやり行動の観察方法に関する研究 *大妻女子大学紀要, 家政系*, 27, 81-101.
- 新名理恵 (1991). 子どもの自己制御の発達 古畑和孝 (編) *社会的行動の発達* 学芸図書 pp71-94.
- 関 清佳・松永あけみ (2005). 幼児の向社会的行動と自己制御機能との関連 *群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編*, 54, 221-231.
- 首藤敏元 (1995). 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制 筑波大学発達臨床心理学研究, 7, 77-86.
- 薛 迪 (2010). 中国の大学生に見る援助規範意識の特性とその規定要因—ボランティア活動に着目して— お茶の水女子大学グローバル COE プログラム 「格差センシティブな人間発達科学の創成」, 12, 公募研究成果論文集, 73-80.

謝辞

本調査に多大なご協力をいただきました、幼稚園の園児の皆様、保護者の方々、先生方に心より御礼申し上げます。